

今年も残り二週間となりました。皆さんにとって、2017年はどうのような年だったのでしょうか？どこか重たい空気が漂っているように感じるのは私だけではないと思いますが、いかがでしょうか？もちろん今年もいろいろと喜ばしいことがありましたが、同時に、悲しい出来事もたくさんありました。記憶に新しいところでは、ラスベガスのコンサートやテキサス州のある教会での銃乱射事件もそれに含まれると思います。

また日本では座間で連続殺人があったり、相撲好きな人にとっては残念なことですが、モンゴル人力士間での暴行事件もまだ進行中です。台風、地震、山火事など、自然災害による被害も多くありました。それらに加え、個人的に家族や友人を亡くされた方、大きな病をわずらったという方もおられるでしょう。

そのように社会全体や個人としても、様々なところを通る私たちですが、そういうことは最近になって起こり始めたのか、というところではありません。人の歴史を見ると、形こそ違いはあれど、昔からあらゆる問題が起こってきたのです。そして、その最たるものは、死ということができます。今日開いた箇所にも、東方の博士たちが、ユダヤ人の王として生まれた主イエスを訪ね、彼を礼拝した後、悲劇が起こっています。

マタイ 2:16-18「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。17 そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。18『ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。』」。

どうぞイメージして見て下さい。それがどんな理由であれ、この時、愛するわが子を殺された人々の心の嘆き、悲しみは言葉では到底言い表せないものであったと思うのです。この「ラケル」とは、イスラエル民族の父祖たちの一人ヤコブの妻のことですが、ここではベツレヘム（ユダ）とその近辺（ベニヤミン）の人々を指してそう表現したのでしょうか。わが子が殺され、もういなくなった彼らは、慰められるのを拒んだといえます。誰も想像したくない光景ですが、主イエスの降誕の背後でも、そのような悲劇が起こっていたのです。

では、その時、神様はどこにおられたのか？なぜそのようなことが預言されていた、つまり、神様はご存知だったのに、それを事前に防ぐことをされなかったのでしょうか？神様は、残虐なヘロデ王を野放しにすることで、彼に抵抗することのできない民を見捨ててしまわれたのでしょうか？確かに神様の御心、そのご計画のすべてを理解できない私たちには、そのように思えることがあります。でも、神様は、今日のマタイ 1章 23節を通して、あることを約束しておられるのです。

「『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である)」。神様は、私たちとともにいて下さる、といわれます。これはもともとイザヤという預言者を通して語られたことですが、それは実に主が生まれる700年も前のことでした。神様は、そのおことば通りに、処女マリヤから主イエスを生まれさせて下さったのです。この方を通して、ご自分が私たちとともにいて下さることを実現して下さるためです。

では、それはいったいどういう意味ですか？神様がともにおられるなら、私たちはもはや苦しみや悲しみに直面しなくなるということでしょうか？確かに、次の世、つまり、天国においてはそうだと言われています。黙 21:3-4「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」。

天国では、もはや死はありません。悲しみ、叫び、苦しみもないのです。これは大きな希望を私たちに与えてくれます。でも言い方を変えるなら、そこに入れられるまでは、つまり、今の世では死の現実はあるのです。私たちは、この世にある限り、悲しみ、叫び、苦しみの中を通ります。でも、そのような中で、神様は主イエ

スを通して私たちとともにいて下さるのです。それが私たちにとっての望みであり、救いです。なぜなら、主イエスは、私たちがいかなる苦難や試練を通る時にも、ともにいて下さるために、この世に生まれて下さった、私たちのところに来て下さったからです。

コロ 1:15-17 「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています」。

主イエスは、この世の初めから神様とともにおられた神の御子であるゆえに、またすべてのものを造り、それらを今日も御手の中に治めておられるゆえに、私たちはそのような方がこの世に来て下さったというのです。そして、この神であられる方が私たちとともにいて下さるので、今は悲しみ、叫び、苦しみを経験することがあっても大丈夫といえます。やがての日、主が私たちの目から涙をすっきりぬぐい取ってくださるからです。

ただ、そこには問題もあります。主イエスの方では、私たちとともにいて下さるというわけですが、では、私たちの方はどうなのか？つまり、そのことを願うのか？それとも、その必要はないと、神様を退けるのか？日本には、「苦しい時の神頼み」という言葉がありますが、そのような態度を取ることは、果たして神様の前に正しいことでしょうか？もしある人が、あなたに対して普段は全く見向きもしないのに、でも困った時、苦しい時には、いかにも親しいかのように近づいてきたらどうですか？そして、問題が解決するといなくなる。あなたはそのような人を友と呼び、親しくしたいと思いませんか？

神様は、困った時はもちろんのこと、でも、いつでもご自分との親しく近い関係を求める人にご自分も近づいて下さるのです。そして、愛と信頼との関係を深めて下さいます。あなたはそれを願いますか？では、私たちは、神様がそのようにしてともにおられることをどうやって知ることができるでしょうか？主イエスを通してです。もっと言うと、主の十字架の死と復活を通してです。

なぜ主イエスは、33歳ほどの若さで十字架にかかれたのでしょうか？死罪に値するような重罪を犯したからですか？ご自分が神の子であることを明らかにされたことで、ユダヤの指導者たちが、それを神への冒瀆罪、つまり、死刑に値するとしたからです。でも、彼らの処刑法は、石打ちのはずです。それがなぜ十字架刑に変わったのか？旧約聖書に「木にかけられる者は呪われる」と書いてあるから、つまり、彼らは、主イエスに対する嫉みに燃えていたので、ただ殺すだけでは物足りず、呪いにかけて主を殺したかったのです。それゆえに、民衆を扇動し、ローマ総督ポンテオ・ピラトのもとで十字架刑となるように仕向けました。

主イエスは、十字架上でいくつかことばを発せられましたが、その一つはこうです。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マコ 15:34）。主は、十字架上で、神様にこのように叫んで言われました。このことばだけを聞くと、主がご自分の死について知らなかったようにも思えます。でも、これもまた実は旧約聖書からの引用で、このように叫ばれることで主イエスは自ら進んで神様に見捨てられることをして下さったのです。神を神としない自己中心な私たち、本当は捨てられるはずの私たちが、その身代わりの死によって神様に受け入れられるためです。

そのようにして、主は、私たちのために十字架の死を遂げられましたが、弟子たちに前もって話しておられたように、三日目に死より、よみがえられました。彼を罪と死からの救い主と信じるすべての人に、罪の赦しと永遠のいのちを与えて下さるためです。ここに神様が、御子を信じるすべての者と、この世を超えた永遠とともに過ごして下さる理由があります。

神様が永遠とともに過ごして下さるということは、当然、今の時とともにいて下さるのです。そして、神様がともにいて下さるので、私たちは、今の時、苦しみ、悲しみ、叫びがあっても、その永遠としての天国を待ち望むことで、それを耐え忍ぶことができます。でも、もしこの希望がなければ、間違いなく、暗やみが私たちを覆ってしまうことでしょう。それほど、この世には耐えがたい苦しみ、悲しみ、叫び、そして、何よりも死が存在するからです。

今は楽観的に人生を捉えている人もおられるかも知れません。でも、必ず困難と思える日が来るのです。それはヘロデ王にわが子を殺された人々のように、突然やってくるかもしれません。または、病を患ったり、老いによって体に変化が生まれることで、徐々に実感がわいてくることもあるでしょう。いずれにしろ、この世にある限り、それが何であれ、私たちは苦しみ、悲しみ、叫びの現実を避けられないのです。

でも、ご自分のひとり子を、私たち罪人の代わりにさばくことで、私たちを赦すことを願われる神様、また、御子を死よりよみがえらされた御力によって、私たちに永遠のいのちを与えて下さる神様は、私たちがいかなる中を通る時にも、たとえそれが死であったとしても、ともにいて下さいます。そのようにして私たちにインマヌエル（神は私たちとともにおられること）をわからせて下さるのです。主イエスは、そのことのために私たちのもとに来て下さいました。このお方を心の真ん中にお迎えしようではありませんか。